渡米移民と四邑の妻の間の大衆文芸

――民謡と木魚書の中の「金山婆」[1)]――

Gamsaan po in ballads and *muk-yu shu*: Popular literature between overseas Chinese in the US and their wives in *Sei Yup*

田　中　　景

Abstract

This article delineates how overseas Chinese in the US and their left-behind wives in *Sei Yup* region in Pearl River delta, who were long separated to each other, maintained their family relation as a socio-economic unit by introducing vernacular literatures from *Sei Yup* popularly produced and shared among them between the Chinese community in the US and villages in *Sei Yup*. The article specifically focuses on several pieces of ballads and novels called *muk-yu shu* that depict the experiences of *gamsaan po*, the emigrants' wives, in *Sei Yup* and interprets them within the changing historical contexts from the late 19th century through early 20th century. The article concludes that the selected pieces of ballads and stories of *muk-yu shu* demonstrate typical issues prevalent among overseas Chinese families that might ruin their goal of emigration as family strategy, and that they also mediate husband and wife to maintain a family by suggesting them to observe the conventional moral codes and roles of gender.

はじめに

1990年代末以来，アメリカ合衆国の在米中国人史研究は，19世紀中葉から20世紀前半における中国人移民の渡米目的が，アメリカでの定住ではなく，出身郷里での家族や宗族の社会的・経済的上昇であることを明示してきた。中国人移民の大部分は家族を郷里において渡米した男性の出稼ぎ労働者（sojourner）であった。従来の研究は，彼ら移民の経験をアメリカ史の文脈に位置付けて解釈し，1882年制定の中国人排斥法などの人種差別的な法制度や，ヨーロッパ系アメリカ人による中国人に対する偏見や暴力のために，移民の定住や家族の呼び寄せが阻まれた側面を主張してきた[2)]。他方で，移民の経験を一国史の枠組みを超え

たグローバルな視点から捉え直す動向が高まり，中国人移民の動機を伝統的な家族制度を基盤とした出身地における家族や宗族の発展と位置づけ，出稼ぎをそのための家族の戦略として見直す研究が輩出されるようになった[3)]。

このような研究潮流を背景に，中国人移民の家族が新たに注目され，渡米が郷里の家族にもたらした影響が明らかにされてきた。特に移民の妻は，夫からの外貨送金により裕福な暮らしを手に入れる可能性があったこと，また多くの妻が長い年月にわたり夫の帰郷が無く，若くして未亡人同然の身となったことから，周囲の羨望と注目の的となり，主要な移民送出地域の広東省珠江流域四邑の方言である広東語で「金山婆」と称されるようになった[4)]。「金山」とは「金の採れる山」の意味で，中国人が太平洋を越える直接の契機となった，1849 年に始まったカリフォルニア州のゴールドラッシュに由来し，広くアメリカを意味する。渡米するだけの資力や人脈を持つ男性は「金山客」と呼ばれ，「金山婆」はその妻を示す。

中国人移民の本来の目的が，出身社会における家族や宗族の社会的・経済的上昇の実現にあるならば，社会の基盤としての家庭の維持は彼らにとって第一義であったと言える。言い換えれば，渡米の動機は個人の成功ではなく，集団の成功であり，そのために渡米者の家庭は一つのトランスローカルなループ状の経済体を形成し，夫婦はそのループの中で共通認識としてのジェンダーの役割を担いながら協働する形態がとられた[5)]。やがて時間の経過とともに中国人移民の家庭にはその性質に特有のひずみが様々に生じ，夫婦は家庭を維持するための調整が必要となった。

そして，家庭を維持するための調整の働きをしたものの一つに，民謡や物語を含めた大衆文芸が挙げられる。本稿では，その中でも四邑の人々の間に浸透していた広東語の民謡および「木魚書」と呼ばれる物語を取り上げたい。それらの民謡や物語の中には，移民の妻を主体にその境遇や情緒を語りながら，移民の家族の実態や家庭に生じるひずみを映し出す作品が少なくなく，移民の出身社会と在米中国人社会の双方で共有された[6)]。本稿は，まず，19 世紀中葉から 20 世紀前半期における四邑の大衆文芸について概説する。その後，中国人移民とその家族の形成と変容を中国人排斥法制定前後の二つの期間に分けて歴史的に辿り，それぞれの期間に創出された「金山婆」を主体とする民謡および「木魚書」を読み解く。そのことを通して，大衆文芸には移民送出地の社会基盤と規範を維持しながら移民と家族の渡米目的を支える役割が備わっていたことを提示する。

1. 四邑と移民地をつなぐ大衆文芸

中国からアメリカの中国人コミュニティにもたらされた大衆文芸は，大多数の移民の出身地域を反映して，古くから広東省四邑の農村で親しまれていた広東語による民謡，詩歌，そ

して「木魚書」であった。これらの方言による大衆文芸には，同時代の四邑に生きる人々の生活，風習，世相や社会規範が表現されている。よって，大衆文芸は，四邑の農村の人々にとって地域との絆を深めながら自身の生きる道を確認するものであり，また「故郷に錦」を目指していた四邑出身の移民にとっては，郷里や家族と自身をつなぐ紐帯であったと言える。

四邑に根差した民謡や詩歌，「木魚書」は，決まった音節数による構成や踏韻を含む定型詩の形式をとり，歌，詠み，語りを以って演じられる口承文化であった。また，これらには広東語特有の慣用表現や地域の風習を表現する言葉が含まれているため，学校教育を受けておらず，文字の分からない女性にも内容を理解し，楽しむことができた。さらに口承文化であったこれらの大衆文芸は文字で書かれ，本にまとめられることで普及が進み，四邑出身の人々の生活や精神性に大きな影響を与えた[7)]。

中でも「木魚書」は，特に女性を対象に教育的な働きをした。「木魚書」とは，中国の古典や歴史，神話，広東省の民間風習や詩歌などを「木魚」という定型詩で著した文芸作品のことで，物語を通して聴衆や読者に義勇忠貞，守貧行孝，節婦烈女といった儒教の道徳律を説いていた[8)]。「木魚書」の作家には，科挙の落第などにより官職に就くことの出来なかった学者がなったとされている。清朝の初期には，「木魚書」は木版印刷を使って広州や仏山，東莞で大量に生産され，四邑を含めた広東省南西部一体で安く売られるようになった。「木魚書」の消費と普及は，主に各地域を訪れる盲目の旅芸人が，女性たちを主な聴衆として詠い聞かせるか，または個人が「木魚書」を購入し，芸人に代わって周囲の人々に詠み聞かせるかによった。社会階層の違いや貧富の差に関わらず教育の機会が無かった女性にとって，「木魚書」は数少ない娯楽であるのと同時に，歴史や民俗文化，道徳規範，そして場合によっては文字を学ぶ数少ない教育の機会となったのである[9)]。

「木魚書」の物語は，19 世紀中葉には男女の運命的な結婚を題材に，節婦，烈女，男女の別離の哀惜，夫婦の責任などを著すものが主流となった。さらに 20 世紀に入ると，同時代の世相や社会運動もまた物語の題材となった[10)]。このような経緯から見て，「金山婆」を題材とする物語の創作は，同時代の「木魚書」の潮流に合うものであったと言える。

これらの大衆文芸は，移民の国外渡航に伴って海外の中国人社会にもたらされた。四邑出身の移民は，アメリカで故郷の民謡を歌い，郷里への思いや渡米の経験を詩歌に詠んだ。また，20 世紀に入り，サンフランシスコの中国人コミュニティに新聞社や出版社が次々と創業すると文芸作品の出版が促進した[11)]。新聞社は毎日の日刊に広東語の民謡や詩歌を掲載し，出版社は移民によって詠まれた詩を集めた詩集や「木魚書」を出版した[12)]。このような出版業の発達の結果，大衆文芸は移民送出地と移民地の間で流通した。例えば，移民送出各地域で在外中国人の郷里との繋がりを維持する目的で，郷里と中国国内の様々な情報を伝える「僑刊」と呼ばれる雑誌が発行され，広く海外の中国人コミュニティ内で購読されていたが，そこには郷里に伝わる民謡や詩歌だけでなく，移民が創作した詩歌も掲載されてい

た[13]。また，広州や香港の書店は，広東省の「木魚書」を中国人コミュニティの書店に輸出し，さらに双方の出版社で出された「木魚書」は互いの出版社で増版され，移民送出地域と中国人コミュニティの双方の市場に出回った[14]。大衆文芸は，四邑と移民地を行き来しながら，双方の人々の生活を支えるようになったのである。

2. 渡米移民とその家族　1840 年代から 1880 年代まで

i). 移民創出の背景

19 世紀中葉以降の広東省珠江流域からカリフォルニア州への移民の流れは，当時の広東省を含む中国の国内情勢と国際関係から生み出された様々な要因が関連し合って生じていた。すなわち，広東省珠江流域における市場経済の発達と小規模農民層の解体，阿片戦争とその顚末としての欧米列強への門戸開放と経済競争，地域における騒乱，そして金採掘を象徴するカリフォルニアのインセンティヴが複雑に絡み合って移民が創出されたのである[15]。

広東省珠江流域では，すでに 19 世紀中葉以前から市場経済が発達しており，商品作物・製品の生産，銀を通貨とする金融システム，そして賃金労働システムが根付いていた。特に省都広州に近い南海，番禺，そして順徳の三県から成る三邑地域では，国内外の市場向けに絹や真珠，オレンジやライチなどの農産物の生産が盛んで，澳門や香港など国内市場に送られただけでなく，唯一の海外貿易港であった広州から西欧諸国へ輸出された。これに対し清朝政府は地主階級を優遇して工業や技術革新を急いで進めようとはしなかった。商品作物・製品の生産の拡大に伴って多くの小規模自営農民が土地を手放し，地主のもとで小作農になるか，あるいは都市に出て賃金労働者になるかしたが，産業資本主義の発達の遅れにより，特に都市部では労働力を吸収しきれない状態にあった。このような事態は，地形的に恵まれた三邑よりも山がちで農耕に適した土地が少なく，広州まで距離のある新寧（1914 年より台山），新會，開平，恩平の四県から成る四邑地域に顕著であり，各地で余剰人口が増加した。

しかし，広東省の社会経済システムは，中国に市場と労働力を求める欧米列強の圧力によって急速に崩壊へと向かった。1840 年の阿片戦争でイギリスに敗北した結果，清政府は 1842 年の南京条約でイギリスに対し広州を含む 5 つの港の開港，貿易の完全自由化，香港の割譲，そして賠償金の支払いを承認し，さらに附属協定として各種の不平等条約を締結した。また 1844 年には，清政府は南京条約同様の条約をアメリカ合衆国やフランスとも締結し，益々自国の主権を脅かされて弱体化していった。中国国内では，人々は重税を課され，商品作物・製品の生産と輸出に携わる農民や商人は無関税で国内に流入する海外製品との価格競争に敗れ，小作農や労働者は賃金を削減された。また 5 つの港の開港により海外貿易港としての独占的な地位を失った広州では，港湾労働や流通関連業務の規模が縮小し，その結

果多くの労働者が職にあぶれた[16]。

不満を募らせた農民層や労働者層は，徒党を組んで各地で暴動を起こすようになった。特に新會や新寧では，義和団が 1843 年から反清政府運動を活発化させ，1854 年に蜂起して清政府軍に鎮圧されている。また 1856 年には新寧で，先住の本地人と隣接する赤渓から土地を求めて流入してきた客家人が，限られた農地の所有を巡って衝突し，同年のみで 3,000 人の死者を出している[17]。このような農民蜂起や集団間の争乱の最中は，通常の商売や物資の輸送が中断された。また，暴動を鎮圧するために健康な男性は徴兵に駆り出され，農村は主要な労働力を失って作物の生産と農地の維持が益々困難になった。さらに蜂起に参加した農民や労働者の残党が盗賊や海賊となって村々を襲撃しては略奪を繰り返すようになり，その上洪水や干ばつなどの自然災害に見舞われて農地は荒廃した。

以上のような状況下にあって，特に四邑では小規模農民層が一家の生計を立てていくことが困難になり，国外に職を求める人々が増えていった。清政府は自国民の国外への移民を禁じていたが，新たに獲得した領土や植民地の経済開発のために安価な労働力を必要としていた西欧列強は広東省政府に強く圧力をかけ，清政府は 1860 年にイギリス，フランス連合軍，そしてロシアと北京条約を，また 1868 年にアメリカ合衆国とバーリンゲイム条約をそれぞれ締結し，自国民の海外移民を解禁することとなった。元来広東省は中央政府から遠く離れた大陸南部に位置し，海が近くかつ海外貿易港を擁し，漁業や商売が盛んな土地柄であったことから，すでに条約締結以前から東南アジアなど近隣の国や地域への渡航や移民が行われており，一般に広東省の人々にとって海外への渡航は馴染みのないものではなかった。

ii)．中国人移民とその妻

広東省珠江流域からカリフォルニア州へ渡った中国人移民は，主に三邑出身者と四邑出身者に大別される[18]。両者とも渡米の契機となったのは 1849 年に始まったカリフォルニア州のゴールドラッシュであった。以降，中国からの労働移民の入国を禁止する中国人排斥法が制定された 1882 年までの期間に概算で 258,210 人の中国人移民が渡米したが，そのうちの半数以上が四邑の出身，その大部分が新寧の出身であった。他方，同期間の三邑出身者のアメリカにおける人口数は，数百から 1,000 人を越えない規模であった[19]。

広州近郊に位置する三邑には富裕な貿易商人が多く，彼らの多くは広州の経済不況の影響を受け，広州やその近郊で商売をすることに不安を覚えて渡米した。彼らはアメリカ人企業家と連携して，サンフランシスコで地元住民を客に中国製の絹や漆細工など高級な工芸品を売る店を経営する他，同胞の中国人移民を相手に食料品や日用品を売る店を商った[20]。

一方，広州から離れた四邑は人口の約 60% が小規模農民で，彼らの多くは前述の様々な要因から貧困に陥った結果，家の生計を立てるために渡米した。彼らは 1850 年代には主に金を含む鉱物資源採掘に，金採掘のブームが去った後の 1860 年代から 70 年代にかけて大陸

横断鉄道網の建設に従事した。また，1870年代にはカリフォルニアの農地の開墾や商品作物生産に従事する他，様々な日用品の製造業，エビやアワビの漁業，飲食店やクリーニング店などのサービス業に参入し，賃金労働者になるのみならず起業する者も出てきた[21)]。

彼らを特にアメリカへと駆り立てたのは，広州に商売や出稼ぎに出かけた際に目にした金鉱採掘や鉄道建設に誘致する汽船会社の広告や，アメリカ人企業家に雇われた仲介業者による斡旋，そして後にはアメリカから帰郷した先達の語る「アメリカの神話」で，そのいずれもがアメリカでは賃金が高く大金を儲けることができると語った[22)]。資力のある三邑出身の貿易商人が渡航や起業のための資金を自ら準備した一方，四邑出身の農民は土地を売却し，親類縁者や知人から借金をして渡航費を捻出するか，あるいは雇用主側が渡航費を立て替える信用貸し制度を利用し，1860年以前は広州，それ以降は香港から出航した。

カリフォルニア州の労働集約型産業の低廉労働は，同時代の四邑の農業労働と単純に比較した場合，高い収入をもたらした。1870年の四邑の小作農の年収は米ドルに換算して8ドルから10ドルであったところを，カリフォルニア州で大陸横断鉄道建設に就いた中国人労働者は，年間60ドルから180ドルを貯蓄した。また，1870年当時，中国人労働者が郷里の実家に送った一年間の送金額の平均は30ドルであったが，これは農村に暮らす家族一家が一年間衣食住を維持するのに足りる額であった。

しかし，実際には中国人労働者が実家に安定的に送金し，帰郷後の生活に困らないだけの貯蓄をして故郷に戻るのは容易ではなかった。彼らの大半が最低60ドルから100ドルを上回る信用貸しの渡航費と利子の返済に3年から5年かかり，アメリカ入国に必要な書類の作成代行料165ドルの借金の返済にさらに数年を要した。従って，移民が渡米してから初めて帰郷するまでに平均10年を要したとされている[23)]。また，常に安定して実家に送金できるわけではなかった。過酷な労働で得た収入から借金の返済分やアメリカでの生活費を差し引くと手元に残るのはわずかで，多くの中国人労働者が日々の憂さを晴らし，寂しさを紛らわすために中国人コミュニティの賭場や売春宿，阿片窟に通い，それを使い果たしてしまった[24)]。

さらに，ヨーロッパ系アメリカ人住民から受ける様々な差別や暴力は，中国人移民を経済的に追い詰めていった。鉱山や鉄道建設現場，開拓地では中国人労働者の締め出しや暴行に虐殺，彼らの住居や商店の焼き討ちや，中国人住民の街からの追放が頻発した。また，製造業や漁業の領域では，労働組合や企業家の組織的な中国人ボイコット，さらに州や市行政による中国人排斥を狙った各種の法律や条例の制定によって，1900年までには中国人移民のほとんどが上述の製造業や漁業から締め出されてしまった[25)]。

これらの暴力に巻き込まれた結果，経済的に打撃を受けて送金ができず，郷里の家族や親類縁者に面目が立たずに連絡を絶ってしまった者，職を求めて各地を転々とした末に行方知れずになった者，さらには暴力の犠牲になって命を落とした者など，非常に多くの中国人移

民が，数十年もの間，あるいは一生故郷に帰ることができなかったのである。1876 年のカリフォルニア州における中国人人口約 148,000 人のうち，帰郷できたのは四分の一程度であったと見積もられている。また，1880 年代に渡米したある知識人は，100 人中 1 人か 2 人程度しか帰郷できなかったと証言している[26)]。

このようなアメリカにおける現実は，郷里の住民にはなかなか伝わらなかった。四邑の農村に帰省することのできた移民は，自らが受けたアメリカでの過酷な労働や苦しい生活，そして屈辱的な差別や暴力の経験を郷里の人々に滅多に語らなかったからである。その代わりに彼らの誰もが，アメリカでは高い賃金と豊かな消費文化を享受できると親類縁者に語って聞かせた[27)]。こうした先達の移民の成功談から，人々の間ではアメリカに対する幻想が拡がり，男性の渡米熱が冷めることはなかった。

一方，未婚の娘を持つ両親にとって，渡米移民は娘の結婚相手として，将来経済的に豊かな生活を約束すると信じれば好ましいが，実家に送金せず郷里に帰ってこないと疑えば好ましくなかった。当時の女性にとって嫁ぎ先の家こそが自身を生かし，生かされる唯一の場であったためである。当時，新寧の人々の間で歌われていた二つの民謡は，対を成すように「金山客」に対する矛盾に満ちたまなざしを表している。

娘がいるなら学者には嫁がせるな，
部屋に独り閉じ籠り，独り寝する。
娘がいるなら百姓には嫁がせるな，
脚は牛の尿まみれ，頭は塵まみれ。
娘がいるなら「金山客」に嫁がせろ
船に銀をどっさり積んで帰って来る[28)]。

娘がいるなら学者には嫁がせるな，
部屋に独り閉じ籠り，独り寝する。
娘がいるなら百姓には嫁がせるな，
体から土の匂い，息もできない。
娘がいるなら「金山客」には嫁がせるな，
家族と別れたら，忘れてしまう。
娘がいるなら商人に嫁がせろ，
朝食に魚，夕食に肉，誰より優しい[29)]。

中国人移民の妻となった女性は，夫の実家で嫁として，母として，そして労働力としての役割を担った。当時，中国からの女性の渡米はまれで，その場合人身売買により中国人コミ

ュニティに送られた売春婦がほとんどであった[30]。その背景には，家父長制，父系，そして夫方居住制を基盤とする中国の家族制度があり，女性は家で夫と舅姑に仕え，家事，育児，そして先祖を祀ることが義務とされた。こうした伝統的な慣習の他，渡航費用の節約や渡米による儒教道徳の堕落への危惧も女性に渡航をさせない理由であった[31]。また特に農民層の女性は家庭内での役割に加え，戸外での労働もした。一般に彼女たちは纏足の慣行がなく，家畜の世話，内職，紡績などの工場労働，柴刈り，農作業，生産物の市場での販売などをして家計を支えた。そしてこのような嫁の務めは，まだ正式に結婚していない婚約中の女性や，夫や舅姑を亡くした寡婦にも果たすことが期待された。例えば，渡米した夫や許婚が現地で客死した場合，妻が実家に戻ることや，別の男性と再婚することは，節婦にはあるまじきことであった[32]。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて発刊された四邑各県の地誌には，婦徳を全うした女性たちを列記する巻の中で，移民の妻が幾人も挙げられている。例えば，困窮の中渡米した夫や許婚を待つ間，紡績をしながら舅姑の世話をした者や，夫が客死した後も嫁ぎ先にとどまって家を守った者，一人で舅姑の最期を看取り，養子を後継ぎに迎えて育てた者などである[33]。当時の移民の妻が皆一様に婦徳を遵守し，あるいは困窮や独り身の人生を送ったわけではないであろう。しかし，彼女たちに共通していたことは，数年から数十年，あるいは一生の間，夫からの送金や夫の帰りを待つ不安と孤独を抱えながら，生活と向き合い，家を守らなければならなかったことである。

iii). 民謡の中の「金山婆」

前述のような，いつ帰るか分からない夫を待ち続ける不遇な妻の姿は，中国人排斥法以前の 19 世紀後半の中国人移民の妻の典型的な表象であろう。同時期の移民は，主に労働集約的な産業に就労し，また様々な経済的・社会的排斥を受けたことから，その多くが借金の返済を抱え，安定的な雇用や収入に恵まれず，帰郷できなかったからある。開平には，長い間夫の帰りを待ちわびる自身の境遇を嘆く若い妻の心情を歌う民謡が幾つか伝わっている。これらの民謡がいつ成立したのかは不明であるが，少なくとも大陸横断鉄道建設が行われた 1860 年代には四邑から多くの移民が渡米していたことから，19 世紀後半には歌われていたと推測される。また，これらの民謡は，歌詞を口ずさむ開平出身の移民によってアメリカにも伝えられたと考えられる。いずれの民謡も一年間の時の流れと季節の移ろいを毎月の農村の行事や祭事とともに歌っており，周囲の家庭の明るく楽しそうな様子と移民の妻の孤独や悲しみ，そして不安が対照的に表現されている。

そのうちの一つ「金山婆自嘆」と名付けられた民謡の歌詞からは，19 世紀の四邑に典型的な農民層の渡米移民の妻の姿が見て取れる。

初更（19 時から 21 時までの時間）に目を覚まし涙が溢れる，あなたがこの部屋から去っていったことを思い出して。
胸いっぱいの不安を誰に話せようか，半年間夫婦が共にいないなど。
物憂げに窓辺に座り外を見つめる，夫はいつ帰ってくるのかしら。
……
正月が過ぎ去り二月になり，山林には百花が咲く。
花はやがて種を成す，わが身が嘆かわしい，息子も娘もないのに財産など意味がない。
……
瞬く間に六月に入り，畑に実った豆を収穫して鋤で耕す，
一生辛い労働に耐える方がまし，夫婦が天の川に隔てられることに比べれば。
……
十一月は冬至，どこの家も丸い餅をこしらえる，
冬至の夜は長くまた昼は短い，翼を付け「花旗（アメリカのこと）」へ飛んで行けないのが口惜しい。
……
十二月，年の瀬がやってくる，あなたを待ちわびるこの眼差しは地平線を貫く，
廿八日，帰ってきますように廿九日，三十日，帰ってこなくてもう一年。
家族が集う日は一人で耐える苦行のよう，口に入れた蜂蜜はちっとも甘くない。
どうか来世は女ではなく，神仙に生まれますように。[34)]

上の歌詞からは，この女性が一人の夫に添い遂げ，一生を独り身で過ごす覚悟でいること，一家の生活を支えるために農作業をするのもいとわないこと，そして，後継ぎとなる子どもがいないことに心を痛めている様子がうかがえる。

別の民謡「十二月思夫歌」もまた，海外に出かけていった夫の帰りを待つ妻の思いを同様の形式で歌う。

三月になれば，清明節，どの家も墓掃除に出かける，
よその家の墳墓は白い紙が掛けられているのに，我が家の墳墓は青々とした草で覆われている，
ああ，あなた，帰ってきてください，お墓を紙で飾って清明節を過ごしましょう。
……
八月になれば，肌寒い秋風，どの家も女は衣裳を縫う，
よその人が縫う衣裳は主人が袖を通すのに，私が縫う衣裳は衣装箱に収められる。
……

十二月，また一年，橙色の金柑の実を神前に供える，
まだ戻らぬあなたが帰って来る日がきますように，幾千幾万もの金銀を稼いで，
吉日を選んで新しい家を建て，二人一緒に新年を過ごしましょう。[35)]

この歌詞もまた夫が不在であっても先祖の墓参りや夫の衣服の仕立て，神仏へのお供えなど，嫁の務めを全うする女性を歌っている。歌詞には，夫の行先は「外洋」とあるのみだが，「幾千幾万もの金銀を稼いで」の表現からアメリカに渡ったと考えられる。3月の清明節とは家族で先祖の墓参りをする祭事で，その家に男子が生まれると墓に白い紙をかけるのが習わしである。したがってこの女性もまた子がない。財を成し，家を建て，子どもを産み育てる夢は叶わないのかもしれない，そして夫の帰郷さえも幻想なのかもしれない―そんな妻の不安が歌詞から伝わってくる。

さらにもう一つの民謡，「窮娘自嘆」の中の妻は，厳しい現実の生活を率直に素朴に歌う。

八月十五日は冷たい秋風が吹く，
貧乏人はぼろになった衣服を修繕する。
銭のある家は季節の衣装に足を通す，
銭のない我が家は糞のついたズボンをはいて惨めになる。
……
十月，黄金色の実り，
まだ古米を食べ尽くしていないとよいのだけど，
あなた，どうか新米を携えて帰ってきて。
上の部屋でお義母さんが米をついて，
下の部屋で叔母さんが餅をこしらえる。
……
正月が来て，もう一年が過ぎた，
銭のある家は鶏や鴨のご馳走の良い眺め，
銭のない我が家はいつもと変わらぬ一日を過ごすだけ，
貧乏女は一年が巡ったことを嘆き，
後で運が巡ってくることを願う。[36)]

この民謡の歌詞には夫の行先を示唆する言葉はないが，広州など国内の都市への出稼ぎは農閑期に出かけるのが通常であり，この女性の夫は年間を通して郷里にいないことからアメリカを含め国外へ渡ったことが推測される。特にこの民謡の中の妻の場合，夫からの送金がない中で，食べる物や着る物にも事欠く貧しい生活を心細い思いで送っている様子が伝わって

くる。

上に挙げた三つの民謡は，夫が渡米した結果，農村に残された妻が終わりの見えない孤独感や不安感に耐えながら，嫁としての役割を全うしなければならなくなった現状を歌っている。すなわち民謡は，夫の不在によって生活に余裕がなく，実子に恵まれず，妻が夫に代わって労働を負うなど，郷里の家庭にひずみが生じていることを伝えている。

最後に，先に引用した民謡「金山婆自嘆」と同名の木魚書を一部紹介したい。木魚書『金山婆自嘆』は，20 世紀前半に広州や香港で出版され，アメリカの中国人コミュニティにおいても読まれていた。管見の限りでは 1912 年に広州の民智書局から出版されたものが一番古く，20 世紀の作品であると思われる。形式や内容は民謡「金山婆自嘆」によく似ており，同民謡の歌詞を原型とし，これに改訂を加えたものと見受けられる。実際に，木魚書『金山婆自嘆』では，上述の民謡「金山婆自嘆」の引用部の後に，以下の最後の節が続いている。

宝物のような鏡を手に取って覗いてみる
うつった容貌は少しも変わりない
顔には念入りに化粧をし，白粉を塗り，紅をさし
肌には香水，髪には木屑の油を僅かに塗る
衣服に衣裳を幾重にも重ね
三寸金蓮（纏足をした小さな足のこと）に帯布を幾重にも巻く
髪には光り輝くヘアピンを飾り
耳には玉の環を両方に下げる
私の装いはまさにさりげなく時流に適うもの
鳳凰の目，蛾の眉，桃花の頬（いずれも美女を象徴する表現）
あなたの帰りを待ちわびて，外の景色を眺める
あなたに会う日を待ちわびて，気がつけばなんともう半年が経つ[37]

副題に「賢妻，日中夫の帰りを願う」[38] とされたその妻は，前述の三つの民謡の歌詞から浮かび上がる 19 世紀の四邑の農民層の賢妻ではない。ここに登場したのは，化粧をし，高価な衣装を重ね着し，纏足をした小さな足を愛らしく見せ，装飾品で髪や耳を飾った，美しく洗練された上流層の女性であった。

同書に見られる移民の妻の表象の変化は，どのような理由によるのであろうか。まずは，次節で渡米移民とその家族の変容を歴史的に辿り，それから 20 世紀の木魚書の中の「金山婆」の表象を考察したい。

3. 渡米移民とその家族　1890 年代から 1930 年代まで

i). 引き継がれる移民家族

1870 年代から 80 年代における各種業種からの中国人の締め出しや，1882 年の連邦政府による中国人排斥法の制定は，アメリカにおける彼らの経済的機会を狭めたが，中国人移民の渡米の波が途切れることはなかった。1882 年までにアメリカに入国した中国人移民は，概算で 258,210 人であったのに対し，中国人排斥法の施行期間中の 1882 年から 1943 年までの入国者数は 92,411 人で，1920 年代および 30 年代においては，毎年 2,000 人から 3,000 人が入国した[39]。

移民送出地の社会経済は，荒れた状況が続いていた。日清戦争（1894 年-1905 年）において清軍が日本軍に敗れ，義和団事変（1900 年）が欧米と日本の連合軍によって鎮圧されて北京議定書（または辛丑条約，1901 年）が制定されると，清政府は欧米列強や日本に対して政治経済上の自治力をこれまで以上に失い，かつ多額の賠償金を抱えることになった。こうした国内の半植民地化や経済の悪化は 1911 年の辛亥革命後も改善されず，一般の人々は度重なる外国製品との価格競争や物価高騰，増税，また盗賊の襲来と強奪に苦しんだ。地場産業や輸出品生産の乏しい四邑の農民層は，相変わらず支出に合う収入が得られない状況にあった。

20 世紀のアメリカにおける中国人移民の就労は，特定の職業に集中せざるを得なかったが，その範疇においてはむしろ安定していった。彼らはアメリカ社会から受ける排斥や暴力を逃れ，各地の都市に集住して中国人コミュニティを形成し，主に同胞を顧客とする食料や日用品の小売店，飲食店，クリーニング店を経営するか，もしくはそれらの店で従業員として働く他，アメリカ人家庭の家政夫や，農業や食品加工業の季節労働者となった[40]。特にこのようなエスニック・エンタープライズに従事する限り，アメリカ社会から経済的な排斥を直接受けることはなく，郷里の農村と比較して高い賃金と安定した収入が得られた。そしてそれに伴い，移民の郷里への送金額が増大した。例えば，1920 年代の好況期において，クリーニング店で働く従業員の週給は 50 ドルで，年間 100 ドルから 150 ドル程度を送金すれば家族を十分に養うことができた。また，1930 年代の不況期には同業務の週給は 25 ドルに半減するが，外貨の価値の高さから郷里の家族の生活を維持するには問題なかった。また，当時 3,000 ドルほどで店舗を購入できたが，彼らの収入からして幾らかの貯蓄があれば手の届く金額であった。特に新寧では 1890 年代以降，渡米移民からの外貨送金が目覚ましく増え，さらに多くの農民層の男性が渡米し，1900 年までには農業に代わって移民地からの送金に収入を依存するようになった。1920 年から 1930 年代初頭にかけての送金額は海外から中国への送金全体の 8 分の 1 を占めたほどであった[41]。

中国人移民をアメリカ社会の排斥や暴力から守り，彼らの経済的な自立を支えたのは，血縁や宗族，地縁のネットワークであった。移民は親類や同宗族，同郷者の伝手と支援で渡米し，働き口を見つけ，やがて起業した。また，中国人排斥法においてアメリカ市民の子孫は排斥免除対象であったことから，在米中国人は一様にアメリカ市民の身分を主張し，郷里から息子たちを呼び寄せて就労させ，または自身の店を継がせた。あるいは，新規の移民はアメリカ市民の子の身分を同宗族や同郷の古参の移民から購入し，アメリカ市民の息子を偽装して入国した。いわゆる「書類上の息子」と呼ばれるこのシステムを利用して，1960 年代まで中国人移民がアメリカに入国していたと言われる。アメリカで起業する際の借金もまた同様の人脈を頼りにした。また，移民は親類や友人が集まって作った「會」や，同宗族あるいは同郷者の間で結成された「會館」などの相互扶助組織に所属し，それらが提供する支援を利用しながらアメリカでの生活を維持した。これらのネットワークの利用により，移民はループ状の家庭を幾世代にもわたり繋ぎ続けたのである[42]。

ii)．渡米移民とその妻

中国人移民は数年に一度のペースで帰郷すると，親類縁者にアメリカの土産物を渡し，会食に招いて豪華な料理を振る舞い，また自身や身内の結婚に盛大な披露宴を開いた。このころから，移民はその経済的成功のイメージから「金山客」，そしてその妻は「金山婆」の呼称で呼ばれるようになった。またその外貨送金の力は，彼らを郷里の中上流層に押し上げた。

アメリカで順調に蓄財した移民は，まず郷里の集落の空き地に家族や親戚のために家を新築し，また土地を購入した。彼らの間ではレンガとコンクリート造りでギリシア様式の柱やポーチ，ステンドグラスの窓などで外装を設えた 2，3 階建ての「洋楼」（洋館）が流行した。また，併せて盗賊の襲来に備えて住宅の近くに見張り塔を建てた。「金山客」の外貨送金の結果，出身集落は盗賊の襲来に遭い，特に帰郷した「金山客」とその家族が身代金を目的に盗賊に誘拐される事件が起きるようになったためである。1920 年代から 30 年代にかけて，既存の集落に隣接して「金山客」の洋楼 15 戸から 30 戸が集まる「新村」と呼ばれる集落が四邑各地に次々と出現した[43]。

移民は家族の生活を豊かにした後に，郷里の住民の社会生活の改善に貢献した。例えば，新寧では小中学校の建設が目覚ましく，1930 年には四邑と三邑の両地域で最も多い小学校数と就学児童数を記録するほどであった。新寧における就学熱は，海外出稼ぎが盛んになった 1860 年代に遡る。移民が郷里の家族に手紙を送るために読み書きが必要になったためである[44]。1860 年から 1910 年までの間に新寧には 16 の学校が設立された。20 世紀に入り，移民たちは将来，自分や宗族の子弟たちが技術職や専門職に就き，あるいは役人や学者，または貿易商人となるよう，郷里の学校教育の普及を推進した。漢民族にとって伝統的に教育は立身出世のための王道であり，家族や宗族の中から教養を身に付け，科挙に合格した者を

多く輩出すれば，その家族や宗族の名誉と地位が高められた。子弟に教育を受けさせることは，男性の成功の証と見なされた[45]。

無論 20 世紀に入り，中国国内では旧来の教育制度とその価値観は改変に向かっていった。清政府は教育改革を進め，1905 年には科挙制度を廃止し，続く中華民国政府は西洋式教育法を取り入れた近代的な公教育制度を国内に導入した。さらに 1919 年の五四運動の影響から，旧式の教育制度および儒教思想や父系家族などの伝統的価値観の廃止を唱える新文化運動が都市の知識層を中心に盛り上がった。

しかし，保守的な既存の上流層の反発，近代的な教育カリキュラムのための設備や教員の不足などから，国内における公教育制度の普及は遅々として進まず，実際には 1930 年代半ばに至るまで伝統的な宗族の子弟のための私塾が公立学校と併存し，実質的な教育機関として機能していた。渡米移民によって新寧をはじめ四邑地域に建てられた学校もまた大半が私塾で，旧制度の教育内容が存続し，子弟たちに伝統的価値観が受け継がれたのである[46]。

「金山客」は，学校の他にも図書館，祠堂や寺院などの公共施設の建設や，道路や橋などの社会インフラの整備，また村民への慈善事業に資金を投じた。さらにそれらの事業に関連する建設業や土木業などの業種において，雇用を拡大した。例えば，新寧ではアメリカで鉄道建設に携わった経験を持つ「金山客」が，1906 年から 1920 年にかけて県内に鉄道網を建設した。また，開平や恩平出身の「金山客」は，広州まで続く道路を整備した。購買力を高めた「金山客」の家族や親類は，物質的に贅沢な暮らしを追求するようになり，地元で生産されたものよりも外国製品を好んで買い求めるようになった。その影響から新たに四邑各地の街では市場が発達し消費的文化が栄えた。海外からの様々な輸入品は広州に到着すると，道路や鉄道を利用して四邑の街の市場に送られ，一方，農村から「金山客」の家族をはじめ住民が鉄道や道路を利用してそれらの街へ買い物や遊興に出かけた[47]。

以上のような，出身地域における社会インフラの整備や村民への慈善事業は，移民本人はもちろんのこと，その家族および宗族全体の名誉や社会的地位の向上につながるものであった。このような公共事業や慈善事業活動への資金援助は，もともとは役人や学者，地主などの上流層の人々が行ってきた。彼らはそれらと引き換えに名誉を手にし，社会的地位を顕示し，社会の支配層としての特権を行使していた。特に 1920 年代以降は財力のある「金山客」がこれらの活動を牽引し，上流層の役割を担うようになった[48]。

経済的・社会的に躍進した「金山客」は，地域の未婚の若い女性にとって好ましい結婚相手となった。当時，渡米した移民の間に広まっていた四邑の民謡の中には，成功した「金山客」の人気ぶりを伝えるものがある。

燈籠の光は銀のよう
月の光は銀のよう

大勢に交じり，姉妹が祭壇に向かって座る
どうか良い夫とご縁がありますように
洋楼，豪華な内装の私室，かしましい侍女[49)]

この民謡が示すように，1900 年には成功した「金山客」の妻たちは，もはや農民層の女性のように家計を支えるために戸外で労働をする必要はなく，既存の上流層の女性と同様に家庭の主婦の座に収まった[50)]。

しかしながら，移民の妻は洋楼に住み，小作人を雇い，使用人に家事を任せるようになっても，家を支える主体的役割から免除されたわけではなかった。特に夫の実家に舅や義理の長兄が不在の場合，妻には従来の家事と子どもの養育など家庭での役割に加え，日々の生活に必要な商品の購入から使用人の賃金の支払い，土地の購入や借地料の徴収に至るまで，渡米した夫からの送金の運用と管理が任されたのである[51)]。家計を預かるという意味において移民の妻は事実上の一家の主人であった。夫からの送金が増えるに従い，これと並行するように妻の財務管理能力が益々重視されるようになったと言える。

移民とその家族は，自身や息子の結婚相手には一般に同郷の女性を選んだ。大半の独身の移民男性はアメリカで働いて結婚資金を貯め，帰郷した際に仲人の仲立ちを経て妻を迎えるという従来の手続きを経て結婚した。1900 年以降，在米中国人社会が安定するにつれて，郷里からの妻子の呼び寄せや女児の誕生により，アメリカにおける中国系女性の人口が増えた。ところが，中国人コミュニティの住民の間では，特に中国系二世の女性は平等な男女関係や個人の自由を主張し，勝手に金銭を使い，また舅姑の老後の面倒を見ない等，いわゆる「アメリカ化」の負のイメージで見られる傾向が強く，ゆえに多くの両親にとって二世の女性は，息子の結婚相手として好ましくないと見なされた[52)]。

ところが四邑の「金山婆」は，夫や姑の期待通りの賢妻にとどまることのできた者ばかりではなかった。そして，そのことが在米中国人社会と四邑の地域社会の双方で問題視された。財力を得たことへの高揚感や虚栄心から，あるいは夫からの送金をひたすら待つことへの不安感から，多くの「金山婆」が高価な衣服や家財に金銭を費やし，浪費に走った。また，夫以外の男性，さらには成人した養子や舅と不倫関係に陥った者，不動産を勝手に売買した者もいた。このような「金山婆」のいわゆる婦徳からの逸脱と見られる行為は，閉鎖的で緊密な村落共同体のただ中で瞬く間に住民の噂にのぼり，監視や制裁の対象ともなった[53)]。さらに事件や噂は友人からの手紙や「僑刊」などの発行物に掲載されて海を渡り，アメリカの中国人コミュニティの住民の間に広まった。1918 年に，ある移民男性がカリフォルニアから郷里の息子に宛てて，以下のような手紙を書き送っている。

お前の母親は人一倍派手な身なりを見せびらかすようにして，よく市場に出かけている

そうではないか。…私は同じ宗族の者たちから，自分の家族を管理できないのだから，
お前は男ではないと言われたのだ。
…これで私の名誉も評判も地に落ち，もはや出世の日々は望みようがない[54]。

「金山婆」の不品行は夫の不名誉であり，家族，ひいては宗族にとっての不名誉でもある。そして，郷里の妻の日頃の行いは，在米中国人社会と帰郷後の地域社会の双方における移民の名声と立場に影響を及ぼしかねなかったのである。

iii)．木魚書の中の「金山婆」

先に引用した木魚書『金山婆自嘆』は，同名の民謡の歌詞を土台としながら，そこに描かれた「金山婆」は農民層ではなく上流層の女性であった。20 世紀に入り，「金山客」が地域社会の上流層に参入するようになると，郷里の妻もまた農民の暮らしを捨て，家庭生活や子どもの養育に上流層の生活様式や慣習を採用するようになった。さらに「金山客」の実家は，旧来の中上流層や富裕な「金山客」の家庭から妻を迎えるようになった。牧歌的な 19 世紀の農村風景の中に洗練された「金山婆」を登場させる同書は，20 世紀に入り，大きく変容する「金山客」とその家族の到来を象徴しているように見える。

旦那様のことを思い出して食欲がない
あなたが私のことを何とも思わなくても構わない
でもご両親のことは考えて差し上げなければ
外国へ行ったきり，時の経つのも気にかけないのね
……
あなたが手放さない田んぼは放っておかれて荒れたまま
人を雇って耕し，苗を植える
何はともあれ子がいた方が良い
……
荒れた田んぼは苗を植えずに放っておく
人を雇って耕すのは，本当に骨の折れる作業
家は実のところ不自由していないのだから
夫はいつの日か雲の上に昇る
その姿を雲間にのぞむすべもない[55]

この「金山婆」は，嫁として舅姑を気遣い，農地の管理もしている。しかし，農民層の妻とは異なり，小作人を雇って耕作を任せ，自ら田畑を耕すことはない。「金山婆」の嫁ぎ先の

家は経済的に困窮しておらず，農民の妻のように嫁ぎ先の生計を支えるために労働する必要はないのである。また，舅は成功した「金山客」で，隠居して老後を郷里で暮らし，息子が父の跡を継いで渡米するという「金山客」の家族の継承が推測される。もう一つ，この「金山婆」の 19 世紀の農民層の妻と異なる点は，先の引用部に見られるような当時の理想の女性美の追求である。すなわち，20 世紀の「金山客」が経済力をつけるに従い，妻には節婦であるのと同時に労働力よりも美しさや優雅さを求めるようになったことを反映しているのではないだろうか。

その後，1925 年 4 月に，「金山婆」を主人公とする木魚書がもう一篇，サンフランシスコの新大陸図書館より出版されている。『金山婆拝張王』という題名のその劇詩は，さらに 1929 年には第三版が広州の現象活版社から出版されて，アメリカの中国人コミュニティと四邑の移民の郷里の双方で広く購読されたものと思われる。同書は，市場経済が成熟し，新文化運動が推進される 1920 年代の社会状況の中で生まれた作品であり，そこに登場するのは当時の渡米移民の妻の典型としての裕福で現代的な「金山婆」である[56]。

物語は，名門の出の「金山婆」の語りによって展開される。彼女は開平の農村で姑とともに洋楼に何不自由なく暮らしている。一年前に結婚してひと月ほどで大志を胸に渡米した夫は，アメリカで洗濯夫か料理人として働いていると思われるが，彼女は夫の仕事や生活について何も把握していない。また，嫁ぎ先の家はすでに財産があることから，彼女の夫は自ら渡米して財を成した「金山客」か，あるいは夫の父もまた経済的に成功した「金山客」のいずれかと思われる。彼女は貞淑な妻である一方，家の外にも「何憚ることなく自由に出かける」[57] 革新的で時流の先端を行く女性を自負しており，ヒロインになることを願っている。ある日，彼女は近所に住む老若の親戚の女性たちについて，張王（『三国誌』の英雄の一人，張飛のこと）を祀る神社へ参詣に出かける。神社では祈願や易に大金を使い果たしてしまった挙句，盗賊の襲来に遭う。夜通しかけて命からがら一人自宅まで逃げ帰った彼女は，一日を振り返りながら自身の生き方を反省する。

物語の冒頭部では，主人公である「金山婆」の洋楼での裕福な暮らしぶりが，「豪華な内装の食堂」，「銀白色の燭台」，「香水」[58] など西欧文化のアイテムとともに描かれている。その様子は，「金山婆」が身支度をして，意気揚々と張王参詣に出発する場面にも表れている。

> 私は赤い絹のスカーフを取って肩にかけ，一対の鴛鴦を象った玉のネックレットを付け，十本の指全てに金の指輪をはめた。両手に綺麗な緑色の雲のデザインのついた手袋をはめ，さらにその上に新しい伊犁（新疆西北部のこと）産の玉のブレスレットを二対つけ，金の象眼細工一対を施した古い籐のステッキ，さらにまた以前に海外から輸入された純金の腕時計をはめた。すらりとした長い裾のズボンも同様に優美［だ］…。長い絹の靴下の上に新調の革靴を履いて通りを足早に歩く…。風が吹くと三色の帽子が頭の上でふ

わりと浮き，絹のスカーフが頬をかすめるたびに良い香りを漂わせる。イヤリングをしていないことがかえって清楚で優雅だ。つまりは今日女性が大きく躍進しているということ[59]。

物語の「金山婆」が身に付けているのは豪華な衣装や装飾品だけではない。自由に金銭を使い，それら贅沢品を購入する力をも身に付けているのである。彼女はこの力の獲得を女性の躍進の証拠と語るが，実際には夫からの送金によって付与された力であり，自身の虚栄心のためにそれを行使しているのである。

このように，物語の「金山婆」はいわゆる伝統的な嫁としての自覚に乏しい女性として描かれている。彼女は神社へ向かう道中に立ち寄った新昌の街で様々な商売に沸き立ち，大勢の人でにぎわう様子を見聞した後，一行と合流して神社に到着する。そこでは，張王への祈願に付随するあらゆるものが商品化されていた。彼女は神社の侍者が語る張王のご利益の宣伝に乗せられ，無頓着に金銭を費やしてしまう。

まず「金山婆」は，一式 10 ドルの最高級の供物を一行全員分購入し，その代金として，「銀貨の筒を 2，3 個，滙豊（香港上海銀行のこと）の 10 元紙幣の厚い束」と「大きな金を 8，9 個」[60]，神社に支払う。ところが祈禱を唱える侍者の文言が支離滅裂であることから，彼女はこの侍者が阿片中毒であることに気づき，あらためて自ら張王に祈禱しようと，再度最高級の供物を購入する。その後「金山婆」は，儒者を自負する鑑定師に御神籤を鑑定してもらうと，夫が不倫で堕落していると告げられる。鑑定結果に不安になった「金山婆」は，夫の堕落を正すための張王のお札等一式の代金として「鞄の中から米ドル小切手を一束取り出し，1,200 ポンド分を切る」[61]。結局，物語の最後で彼女は，「衣服に装飾品，そして金銭を含めて全部で 5,000 元余りを費やしてしまった」[62] と回想する。

この「金山婆」の嫁としての自覚の乏しさは，彼女の姑に対する態度にも表れている。彼女は，張王に渡米した夫の成功と実の兄弟姉妹の幸福，そして自身に男子が授かることと容色が衰えないことを願い，それから元寶を三回炉にくべながら，次のように祈願する。

私が家の中で一番嫌いな姑，今まで私がやること成すこと全てにケチをつけてきた意地悪な姑。どうか，老いぼれてもうろくし，よぼよぼのあの姑がすっかり心を入れ替えますように。そして私が自由になり，姑から束縛を受けることがありませんように。どうか，姑が良い意思を心に抱き，これまでの歩みをきっぱりと断ち切り，心底から私を尊重するようにしてください[63]。

この「金山婆」の願いからは，儒教倫理に基づく孝徳の念は見受けられない。伝統的な家族制度のもとでは，女性は嫁いだ家の姑に尽くし，両者は一種の主従関係を築くが，この「金

山婆」はそれを個人に対する束縛と考え，むしろ自身こそが現在の一家の女主人であり，家庭を切り盛りする上で主導権を持っていると自認しているようである。1920 年代当時の四邑の農村社会の家庭は総じて保守的で，特に広州近辺では五四運動や新文化運動の広まりの中で女学校が設立されたが，女子の就学があまねく普及することはなかったとされている[64]。また，これらの社会運動に感化された女性は，上海や広州など都市の女性と比べて農村では少なかったと考えられる。しかしその一方で，交通や流通網，都市の発達によって，農村の住民の行動範囲は拡大し，人々が国内外の様々な商品や情報に触れることが可能になった。西欧文化を消費し，時流の先端をリードすることを自負する「金山婆」の中には，一種の先進的な流行として新文化運動を受容した者も少なくなかったのではないだろうか[65]。

物語が終盤に進むにつれ，上述のような 20 世紀社会に特徴的な感性を持つ「金山婆」の意識は変化することになる。彼女が鑑定師に小切手を渡した後，神社は武器を持った盗賊の一群に襲われる。彼女は必死になって，助けを求めながら神社から郷里の自宅に向かって逃げるが，張王の御加護はおろか誰の助けも得られず，満身創痍になりながら夜明け方にようやく自宅にたどり着く。そして，神社での出来事を回想しながら，以下のように自分自身を振り返る。

> 捕まっていたら，私は盗賊の暴力にどうして耐えられようか？　夫が金銭を払って私を取り戻すことに応じたとしても，私は一体どんな顔をして家に戻れようか？　もし夫が私を取り戻すことに応じなかったとしたら，私はこの先ずっと，盗賊の野営で苦しめられるか，さもなければ，南洋や香港へ売り飛ばされるかだ。そうなれば，私の純潔の誉れ高き一生は台無しになってしまう。[66]

ここで彼女は，昨晩自分が盗賊に捕虜にされ，貞節を失うのを辛うじて免れたことにあらためて気づく。物語は，このことが実際には彼女自身の名誉にとどまらず，夫と自身双方の実家の名誉をも貶めかねないような過ちであることを示唆している。もし夫が妻の身代金を支払わないとすれば，夫はいわゆる汚れた妻の身柄を守る代わりに実家の名誉を守ろうとしているわけである。

続けて，彼女は過去の過ちを正すとして，以下のように決意する。

> ヒロインになるなどという考え方を改めなければならない。まず，勤労倹約に努め，夫が外国で労苦に耐えていることに理解と思いやりを示し，姑に孝順を示して本分を全うし，姑がいつも明るい笑顔で他人を迎えられるようにしてあげよう。[67]

「金山婆」の語るこの決意とは，自身の虚栄心を捨てて家族ために懸命に働き，賢明に財産

を管理し，夫を信じて支え，そして舅姑に孝養を尽くすことである。すなわちそれは，「金山婆」の伝統的な嫁の役割への回帰を意味している。

最後に「金山婆」は，多くの人々が自身の欲望と利益の亡者になり，神に奉仕する神社の侍者や儒者までもが神の霊験を語って金儲けに利用する，そのような市場経済と消費的文化の蔓延による，「昨今の世の中の退廃は本当に見るに堪えない」[68] と語る。そして，世の中を退廃から回復するために強欲な人々の様々な甘言にまどわされず，科学の知識を普及させなければならないと述べ，世の中の女性に対し，「早く目を覚まし，悔い改め」[69] るようにと諭して物語は終わる。

結びにかえて

本稿は，1850 年代から 1930 年代における渡米中国人移民とその家族の経験を歴史的に辿りながら，その経緯において彼らが四邑と在米中国人コミュニティをつないで形成したループ状の家庭がどのように変容し，どのような問題に直面していたのかを，彼らが親しんだ大衆文芸作品の分析を通して提示してきた。特に広東語という移民の出身地の方言による民謡および「木魚書」は，四邑の村落共同体に生きる人々の生活に根差し，精神生活上の指針ともなっていた。また，これらの文芸作品は，渡米した移民や出版社を介して四邑と移民地の双方で共有され，移民が郷里を不在にしている間，自身と郷里や家族の「いま」とを繋ぐ媒体となった。

中国人移民の家庭を謡う民謡や「木魚書」には，移民の妻である「金山婆」を主体とする作品が多く，それらにはそれぞれの作品が生まれた時代に典型的な妻の表象が見られた。1850 年代から 1880 年代においては，帰らない夫を待つ農民層の女性が代表的な妻の表象であった。この背景には，この期間に渡米した移民の大半が，投機的で労働集約的な産業セクターでの低賃金労働，多額の債務，さらに中国人排斥運動による様々な業種からの締め出しや暴力を経験し，成功を収めて帰郷することが叶わなかった実態がある。渡航先で先に挙げた民謡を歌う同郷者の声を耳にし，あるいは自ら口ずさむとき，渡米した移民は幼い頃から慣れ親しんできた農村の風景と生活を思い浮かべ，渡米の動機を思い起こし，同時に家族を扶養するという夫や息子としての役割を全うできずにいる現状と，帰郷までの果てしなさを胸に突き付けられたことであろう。また，特に郷里の女性にとって「待つ妻」の姿は，移民の妻となれば未亡人同然の身となることへの警告であった一方，それでも妻や嫁として全うすべき生き方を伝えるものであったと言える。

1890 年代から 1930 年代における移民の妻の典型像は，洋楼で物質的に恵まれた生活を送る現代的な上流層の夫人であった。この時期の在米移民は，都市の中国人コミュニティで小規模ながらも同胞相手の事業に従事し，安定した収入を得て郷里の実家に十分な外貨を送金

できるようになり，家の新築や土地の購入，さらには地域の社会インフラの整備に貢献して，地域社会の上流層に参入した。移民による外貨送金は四邑に市場経済を発達させ，街は海外からの輸入品であふれ，様々な商売でにぎわい，消費的文化が発達した。他方で移民からの外貨送金に収入を依存し，生産よりも消費中心の生活を送る人々が増えた。このように四邑が市場経済中心の社会に変化したことに伴い，移民の妻には夫に代わって金銭や不動産を管理することが求められるようになった。しかし，実際には消費的文化に溺れ，財産の浪費や不倫に陥る妻も多くいた。木魚書『金山婆拝張王』は，このような 1920 年代の四邑の新旧の文化が入り混じる社会のあり様を映し出し，その中で嫁の役割を忘れ，家庭を崩壊に導きかねない「金山婆」を戒めている。物語は四邑の「金山婆」たちに対して，欲望や感情に支配されて市場経済や消費的文化の罠に陥らないよう，科学的で理性的な思考を身に付けるよう教示していると思われる。また，在米移民にとって物語の「金山婆」の姿は，自身の目の行き届かない郷里の家族を監督することに関して内省を促すものではなかっただろうか。

このように，上記の二つの期間における大衆文芸は，それぞれの時代に特徴的な社会状況の中で出現した異なる「金山婆」の表象を提示している。しかしながら，どの作品も夫婦を一つの家庭を構成する基本単位として位置づけ，互いがそろって家政を営むことをあるべき自然な状態として表現している。夫の渡米の目的は郷里における家族の存続と発展であり，そのために欠かせないのは夫婦がそれぞれの役割を全うすることである。長期にわたる不自然なループ状態にある家庭を維持しようとするとき，民謡や「木魚書」が移民とその妻に教示してきたのは，郷里の社会基盤である家庭を支える根本への回帰，すなわち儒教道徳に則った夫婦の役割に立ち返ることであったと言えよう。

注 ――――――――

1）本研究は 2020 年度東京経済大学長期国外研究員制度により可能となった。この場を借りて，筆者に本研究の機会を提供してくれた東京経済大学，研究員として受け入れてくれた香港中文大学歴史学部，調査をサポートしてくれた香港中文大学図書館および香港大学図書館に心から感謝申し上げる。また，本稿が分析する民謡および「木魚書」の作品は，19 世紀中葉から 20 世紀初頭に使用されていた広東語で書かれており，特に「木魚書」の作品は長文であることから，筆者が直接原文を読みこなすことは極めて困難であった。そのため，中国文学専門家の邵穎容氏に「木魚書」の作品を原文から散文調の現代広東語に翻訳していただき，その後，筆者がそれらを現代日本語に翻訳しながら物語を読解した。さらに筆者が日本語に翻訳しきれなかった作品中の語彙は，あらためて彭淑嫻氏に説明していただいた。この場を借りて，両氏のご協力に心から感謝申し上げる。

2）代表的な研究として，Ronald T. Takaki, *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans* (New York: Penguin, 1989); Sucheng Chan, *Asian Americans: An Interpretive History* (New York: Twayne, 1990) が挙げられる。

3）Adam McKeown, “Transnational Chinese Families and Chinese Exclusion, 1875–1943,” *Journal*

of American Ethnic History, vol. 18, no. 2 (1999): 73–110; Yong Chen, *Chinese San Francisco, 1850–1943: A Trans-Pacific Community* (Stanford: Stanford University Press, 2000); Madeline Y. Hsu, *Dreaming of Gold, Dreaming of Home: Transnationalism and Migration between the United States and South China*, 1882–1943 (Stanford: Stanford University Press, 2000); Sucheta Mazumder, "What Happened to the Women? Chinese and Indian Migration to the United States in Global Perspective," in *Asian/Pacific Islander American Women: A Historical Anthology*, ed. Shirley Hune and Gail Nomura (New York: NYU Press, 2003), pp. 58–74; Elizabeth Sinn, *Pacific Crossing: California Gold, Chinese Migration, and the Making of Hong Kong* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2013); Michael Szonyi, "Mothers, Sons and Lovers: Fidelity and Frugality in the Oversea Chinese Divided Family before 1949," *Journal of Chinese Overseas*, vol. 1, issue 1 (May 2005): 43–64; Michael Williams, *Returning Home with Glory: Chinese Villagers around the Pacific, 1849 to 1949* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2018).

4）郷里に残された妻の経験については，Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 90–123; Williams, *Returning Home with Glory*; McKeown, "Transnational Chinese Families"; Szonyi, "Mothers, Sons and Lovers" を参照。また，福建省から東南アジアへ渡った移民の妻たちに関する研究に Shen Huifen, *China's Left-Behind Wives: Families of Migrants from Fujian to Southeast Asia, 1930s–1950s* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2012) があり，参考になる。

5）このような形態の家族を社会学者の Evelyn Nakano Glenn は，"split household"（分離家族）と称している。Evelyn Nakano Glenn, "Split Household, Small Producer and Dual Wage Earner: An Analysis of Chinese American Family Strategies," *Journal of Marriage and Family*, vol. 45, no. 1 (Feb. 1983), pp. 35–46 参照。また，Philip A Kuhn は，同時期の中国人の出移民は「「家を出た」のではなく，単に職場と自宅をつなぐ廊下の距離を引き延ばした」と論じている。Philip A. Kuhn, *Chinese among Others: Emigration in Modern Times* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2008), pp. 43–49 参照。

6）近年，渡米移民とその家族の経験や生活，心情を伝える同時代の史料として，渡米移民をテーマとする民謡や「木魚書」，あるいは渡米移民が創作した定型詩が特に中国の研究者の間で注目されている。例えば，譚雅伦「弱群心声："出洋子弟勿相配"―珠三角僑郷歌謡中的出洋伝統与家庭意義訳」，『華僑華人歴史研究』，第 4 期，2010 年；譚雅伦「工字不出頭？"金山歌"里的騾仔心声」，『五邑大学学報』，第 17 巻，第 3 期，2015 年；陳子「旧金山出版木魚書《金山婆拝張王》研究―兼論廣東説唱文献的価値」，『晋图学刊』，第 3 期，2018 年を参照。また，渡米移民による定型詩を紹介する先駆的な研究として，Him Mark Lai, Genny Lim, and Judy Yung, *ISLAND: Poetry and History of Chinese Immigrants on Angel Island, 1910–1940* (Seattle: University of Washington Press, 1980); Hom, *Songs of Gold Mountain: Cantonese Rhymes from San Francisco Chinatown* (Berkeley: University of California Press, 1987) が挙げられる。本稿は，これらの研究潮流を踏襲しつつ，個々の作品の分析・批評に加え，作品の出現と意義を歴史的に解釈するものである。

7）梁培熾『香港大學所蔵木魚書収録』，香港，1976 年，xiii 頁。その他，広東省の民謡や詩歌，「木魚書」については，Wing-hoi Chan, "Traditional Folksongs in the Rural Life of Hong Kong," (M. A. diss., Queens University of Belfast, 1985); Sai-Shing Yung, "*Muk-yu Shu* and

the Cantonese Popular Singing Art," *The Gest Library Journal*, vol. II, no. 1 (Fall 1987): 16–30; 渡辺浩司，金文京，稲葉明子（編）『木魚書目録』，好文出版，東京，1995 年を参照。

8）梁，『香港大學所蔵木魚書収録』，同書，209–18 頁。

9）Yung, "*Muk-yu Shu* and the Cantonese Popular Singing Art," pp. 16–17, 24; Chan, "Traditional Folksongs in the rural Life of Hong Kong," pp. 61–63 参照。

10）梁，『香港大學所蔵木魚書収録』，前掲書，215–216 頁。

11）1910 年代までに創刊された主要な中国語新聞は，すべてサンフランシスコの中国人コミュニティで創刊されている。中西日報（1900 年），大同日報（1905 年），世界日報（1908 年），そして少年中国晨報（1910 年）の四紙である。また，1920 代末までにサンフランシスコで創業した中国系出版社は 11 社で，そのうち最大手は大光書林（1912 年），発明公司（1912 年），そして新大陸図書館（1919 年）であった。劉伯驥『米国華僑史　続編』，黎明文化事業公司，台北，1981 年，368–414 頁参照。

12）例えば，1900 年創刊の中西日報は，1908 年より日刊に古典から大衆作品まで文芸作品を掲載した付録を付け，その中には広東語の民謡や詩歌も多く掲載されていた。また，大光書林は移民が自身の渡米の経験を 46 音節の定型詩に歌った詩歌を選出した詩集，『金山歌集』第 1 編および第 2 編を，それぞれ 1911 年と 1915 年に出版している。Hom, *Songs of Gold Mountain*, pp. 31–32, 53–54 を参照。「木魚書」については，本稿で紹介するとおり，新大陸図書館が『金山婆拝張王』を出版している。

13）初めて発行された「僑刊」は『新寧雑誌』（1909 年）であった。1911 年発行の『新寧雑誌』には移民局に留置された中国人移民の詩が掲載された。Hom, *Songs of Gold Mountain*, p. 53。「僑刊」の定義や『新寧雑誌』の発刊と機能については，Hsu, *Dreaming of Gold*, chapter 5 を参照。

14）例えば，広州の書店「五桂堂」は，1915 年に香港に分局を開いているが，そこから多くの木魚書が北米を含め海外の中国人コミュニティに売られていた。渡辺他，『木魚書目録』，前掲書，36 頁を参照。

15）中国人の渡米の社会経済的要因については，June Mei, "Socioeconomic Origins of Emigration: Guangdong to California, 1850 to 1882," in Lucie Cheng and Edna Bonacich, eds., *Labor Immigration under Capitalism: Asian Workers in the United States before World War II* (Berkeley: University of California Press, 1984), pp. 219–45; Chen, *Chinese San Francisco*, Chapter 1; Hsu, *Dreaming of Gold*, Chapter 2 を参照。

16）Mei, "Socioeconomic Origins," pp. 229–30.

17）その他，同一宗族内の土地や権力をめぐる争いもまた移民の要因となった。開平の事例として，Haiming Liu, *The Transnational History of a Chinese Family: Immigrant Letters, Family Business, and Reverse Migration* (New Brunswick: Rutgers University Press, 2006); Y. F. Woon, "An Emigrant Community in the Ssu-yi Area, Southeastern China, 1885–1949: A Study in Social Change," *Modern Asian Studies*, vol. 12, no. 2 (1984), pp. 273–306 参照。

18）渡米者の創出地域としては他に中山地区も挙げられるが、アメリカ本土よりもハワイに多かった。中山出身の移民については Williams, Returning Home with Glory が詳しい。

19）Mei, "Socioeconomic Origin," pp. 23–240; Hsu, Dreaming of Gold, pp. 29–31, 88.

20）Mei, "Socioeconomic Origin," pp. 232–33.

21）渡米者の創出地域としては他に香山県（1925年以降，中山県）も挙げられるが，アメリカ本土よりもハワイに多かった。香山出身の移民についてはWilliams, *Returning Home with Glory*が詳しい。

22）Mei, “Socioeconomic Origin,” pp. 232–240; Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 29–31, 88.

23）Mei, “Socioeconomic Origin,” pp. 232–33. カリォルニアを拠点に広州と香港に人脈を持つ中国人企業家や，送出地と香港およびサンフランシスコに設立された同郷者組織（會館）が労働者の渡米仲介業務を行った。阿片戦争以後の中国人の海外渡航の現象に伴う香港を中継地とした移民ビジネスの展開については，Sinn, *Pacific Crossing*を参照。

24）サンフランシスコの中国人コミュニティにおいて，同胞移民を客に提供された賭博，売春，阿片ビジネスの展開については，Sinn, *Pacific Crossing*を参照。

25）Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 59–60.

26）Mei, “Socioeconomic Origin,” p. 239; Hom, *Songs of Gold Mountain*, pp. 51–52.

27）Hsu, *Dreaming of Gold*, p. 44;

28）胡照忠（編）『美洲廣東華僑流傳歌謡彙編』，和記印刷公司，1970年，51頁。

29）陳元柱（編）『台山歌謡集』，広州惠愛東文化印刷公司，広州，1929年，104頁。胡，『美洲廣東華僑流傳歌謡彙編』，同書，41頁。

30）中国人女性のアメリカにおける人身売買の実態については，Lucy Hirata, “Free, Indentured, Enslaved: Chinese Prostitutes in Nineteenth Century America,” *Signs*, vol. 5, no. 1（1979）pp. 224–44; Benson Tong, *Unsubmissive Women: Chinese Prostitutes in Nineteenth-Century San Francisco*（Norman: University of Oklahoma Press, 1994）; Sinn, *Pacific Crossing*, pp. 219–65. を参照。富裕な貿易商人の場合，家に妻を置いて行く代わりに，「妹仔」と呼ばれる奴婢の身分の女性を妾として渡米させることがあった。

31）Sinn, *Pacific Crossing*, pp. 224–25.

32）Yung, *Unbound Feet*, pp. 18–19; Chen, *Chinese in San Francisco*, pp. 101–102; Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 104–108; Sinn, *Pacific Crossing*, pp. 224–25.

33）『新寧縣志』26巻，巻21，1893年；『開平縣志』45巻，巻35，1932年；および『恩平縣志』25巻，巻20，1933年を参照。

34）『中国民間歌謡集成広東巻　開平県資料本』，1987年，83–85頁。

35）『中国民間歌謡集成広東巻』，同書，77–78頁。

36）『中国民間歌謡集成広東巻』，同書，79–82頁。

37）『金山婆自嘆』，民智書局，広州，1912年，6頁。

38）『金山婆自嘆』，同書，1頁。

39）Yung, *Unbound Feet*, p. 22; Hsu, *Dreaming of Gold*, p. 88.

40）Yung, *Unbound Feet*, pp. 55–56.

41）Hsu, *Dreaming of Gold*, p. 40, 42, and 60.

42）Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 60–61, 71–89; Chan, *Chinese in San Francisco*, pp. 71–73.

43）Hsu, *Dreaming of Gold*, p. 44–45; Williams, *Returning Home with Glory*, pp. 78–79; Woon, “An Emigrant Community in the Ssu-yi Area,” pp. 294–96; Lucie Cheng and Liu Yuzun, with Zheng Dehua, “Chinese Emigration, the Sunning Railway and the Development of Toisan,” *AMERASIA*, vol. 9, no. 1（1982）, p. 71. 経済的上昇を果たした移民の割合は移民送出地によっ

て異なる。例えば，1934 年の台山のある 10 の村を含む区域では，男性の全人口 1,000 人中 600 人が渡米し，彼らの家族のほぼ全てが富裕な生活を手に入れたとされている（Hsu，p. 45）。その一方，開平のある地域では，「新村」に住むほどに成功した移民は 5，6 人に 1 人と見積もられている。四邑一帯では，「新村」の数の多さが地域の経済的発展を示す指標となった（Woon, p. 295）。

44）Hsu, *Dreaming of Gold*, p. 45–47; Woon, “An Emigrant Community in the Ssu-yi Area,” p. 290; Williams, *Returning Home with Glory*, pp. 82–83. また，台山における学校建設と教育推進事業については，Renqiu Yu, “Chinese American Contributions to the Educational Development of Toisan 1910–1940, *AMERASIA*, vol. 10, no. 1（1983）: 47–72 が詳しい。

45）Liu, *The Transnational History of a Chinese Family*, p. 28, 44.

46）Liu, *The Transnational History of a Chinese Family*, pp. 127–28; Yu, “Chinese American Contribution,” p. 67.

47）Cheng et Al., “Chinese Emigrationthe Sunning Railway and the Development of Toisan”; Woon, “An Emigrant Community in the Ssu-yi Area” を参照。

48）Williams, *Returning Home with Glory*, pp. 79, 135–37.

49）胡，『美洲廣東華僑流傳歌謠彙編』，前掲書，106–107 頁。

50）Hsu, *Dreaming of Gold*, p. 42.

51）Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 116–17; Glenn, “Split Household,” p. 39.

52）Yung, *Unbound Feet*, pp. 56–5, 77–78; Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 101–103; Glenn, “Split Household,” p. 39. Hsu は Yung のデータをもとに 1900 年から 1940 年までの在米中国人の男女別人口を提示している。それによると，1900 年には女性 100 人に対し男性 1,887.2 人であったのが，1920 年には女性 100 人に対し男性 695.5 人となった。

53）Szoni, “Mothers, Sons and Lovers”; Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 106–108.

54）McKeown, “Transnational Chinese Families,” p. 95.

55）『金山婆自嘆』，同書，2，4–5 頁。

56）玄虚我生『金山婆拝張王』，新大陸図書館，サンフランシスコ，1925 年初版，および現象活版社，広州，1929 年再版。大衆文学である木魚書では，一般に著者の名前は記載されないかペンネームで記載された。

57）伝統的な儒教倫理においては，良家の女性は自分の部屋から出ることを良しとしなかった。そのことから，本書の主人公が従来の伝統を打ち破るような現代的な女性であることがわかる。玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，1 頁。

58）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，1 頁。

59）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，2 頁。

60）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，5 頁。

61）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，10 頁。

62）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，11 頁。

63）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，7 頁。

64）梁，『香港大學所蔵木魚書叙録』，前掲書，226 頁。

65）四邑の農村における西洋的な価値観の普及の例として，Hsu は 1932 年発行の『新寧雑誌』に，親の進める結婚を嫌がり，恋人と駆け落ちした女性の記事が掲載されていることを紹介してい

る。Hsu, *Dreaming of Gold*, pp. 137-38 参照。

66）玄虚我生『金山婆拝張王』，前掲書，11 頁。

67）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，12 頁。

68）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，12 頁。

69）玄虚我生『金山婆拝張王』，同書，12 頁。